



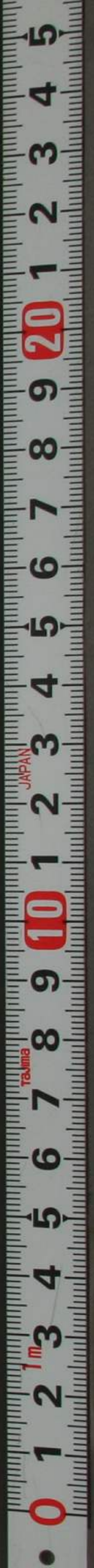
里見八犬傳

第六輯

卷二



べ13  
709  
27





門遠 13  
 號 709  
 卷 27



明治二十六年  
 十月九日  
 麟平

南總里見八犬傳第六輯卷之二

東都 曲亭主人編次

第五十三回 烟上謬々大田を捕ふ  
 馬加竊ふ船虫を棄ふ

船虫へ曉けけく菩提所へとそ出せぬる由守小文吾ひとりをり。復ら後悔も  
 今ちり小過去くくの暇る野猪といひ。このあつといひ人を替又物を替て。うを刃を危く  
 去るゆ今茲へりる星さ之出りく。どあく一厄難のやくまが寅縁るの如く。か  
 どの猶も疑くくひりてきたり。われあふぬび尋思をよる。けがを高屋の暇やく  
 並四郎を救んとく撲傷の某とて。けがし。唐著の財布より沙金包の先出を  
 ぞり藏る小暇あうく笠の裡面は容措つ。けがし。並四郎と呼活。小く。殺せ。彼野  
 猪とんとわれ共侶。けがし。道路へ還る。及び。金を財布に収め。く。懐物



のるを彼奴の知りたるらんゆまのそれ並四郎が陽火恩と復すと倡へく。  
 己が宿所は誘引の殺しと金を奪んとく、斯もひ合されど彼奴の竊り  
 旅客と殺し路費を奪る年々の強盗あり、今宵もト免くはる悪  
 心の起るまゝのれぬわはぶらびり、まうまのこの造りごほも田舎備む。  
 けまをぬぐいんえざる小彼首の壁の三尺をり頼落しを修復り、戸を  
 りく塞死むくづもわらび昔ものや浅草の石の枕の故事ゆもまう芳らぬ  
 癖者ありしをさう思慮の足らむと誘引まう伎倆の涼も係られんとせし  
 愚さよりの時よりの睡覺む毒悪のまゝ死人のそ然るを女房船虫の良らぬ  
 夫と知りまうけままづその刃を儘せし口と心さうらへん、只己のと伶俐  
 氣ふのひ瞞り飲量り、縦彼船虫の素より悪心なりのなりとも出処正  
 し証拠もなれたの尺八をうらへく受納む死るぬらぬと受むる必主人の

悪吏と人ぬや止ると疑ふ、その内心のまわれゆまれまのぬふ一点もこれ  
 對ひて怨を述べ身の薄命とち歎た、只管救ひを求るゆれを授けを  
 まう聴む、告訴する状と今ゆ、小疑も人の影護しとゆひふけま、ま  
 さまげらる、要時その意は任し、彼女房のぬらぬ間おえうそあれと遠く  
 又行包を解披たぐ件の箱と袋の俵は出しく四下をえり、衝と刃を起し、  
 代衣戸の小棚の裏面お容措つゆ、び四下をえり、小縁頬る蚊遣火盆の  
 握太形樹の枝の一寸のまう燃残る、これ究竟と取わけ、灰うち拂ひて、  
 袂へおえ、楚と巻籠く故の如く包は、こく、まう程も、窓の隙より  
 あらみ初て本林を放り、鳥の声、小文吾の縁頬る、雨戸を半開、縹納く、帯  
 締直し、臂辺は、豆も脚絆も物とり揃へ、船虫が帰る、まう今、飲々々と待  
 程、且、く、外面お迫つ、人の足音、をれ、と、ま、果、く、違、を、船、虫、遠、く、門、の



戸開く進まへり。犬田ぬ。今よりはりぬ。さむねびくもれけん。菩提所の首尾  
と死まよ。あらん。済たりけ。ま。ゆ。け。は。後。つ。く。枕。廻。向。の。所。代。を。遣。り。ん。ま。亡。骸。を  
疾。棺。に。斂。め。く。不。覺。入。る。ん。れ。そ。住。持。の。聖。の。宣。ひ。ゆ。れ。と。の。ま。小。文。吾。領  
れ。く。そ。ま。ま。と。せ。せ。れ。れ。嚮。向。の。ひ。り。と。る。ま。う。往。方。も。あ。ら。ぬ。人。を。法。て。い。と。忙。々  
した。旅。を。ま。ま。る。小。後。の。ひ。り。障。り。ま。る。い。ま。あ。の。終。立。別。も。ん。の。の。横。死。の。自  
業。自。得。悼。を。述。す。よ。も。あ。ら。ぬ。と。只。痛。し。死。い。そ。る。の。薄。命。一。善。一。惡。丈。婦。と  
り。も。皆。是。過。世。の。業。報。さ。ん。た。人。の。為。身。の。為。ふ。仏。直。追。薦。肝。要。の。め。香  
魚。と。も。ん。あ。ひ。ね。と。い。ひ。ひ。軀。て。懷。よ。う。こ。り。ま。粒。銀。と。紙。と。捨。り。く。亡。骸。の。ほ。り。ま  
措。つ。背。向。ふ。り。く。免。し。ぬ。と。膝。立。直。し。着。る。脚。絆。も。遠。り。あ。の。程。を。ま。ね。別。路。上  
迹。と。濁。る。水。色。の。二。尺。も。拭。費。刀。身。あ。ら。ぬ。ま。ま。行。包。を。肩。に。被。り。た。ら。し。れ。ん。  
船。虫。今。の。田。ぬ。め。あ。ま。ぞ。れ。の。の。ま。り。よ。火。急。る。り。朝。飯。む。り。も。進。ら。せ。ん。と。思。ふ。も。ま。り

炊をせ。送。憾。し。や。と。い。ひ。け。て。門。辺。に。立。き。目。送。り。け。り。却。説。犬。田。小。文。吾。ら。牛  
嶋。の。く。へ。渡。ら。ん。と。く。河。原。と。望。て。赴。く。程。ゆ。く。と。僅。ま。三。町。許。尚。新。し。草。鞋。を。ふ  
締。附。の。端。緒。の。絶。れ。ぬ。を。と。く。結び。合。せ。ん。と。つ。か。わ。く。足。を。踏。伸。も。背。に。窺。ふ。捕  
ま。の。夥。兵。捕。的。と。被。る。声。より。速。く。地。上。に。礮。と。蹴。倒。し。て。登。り。蒐。く。組。ん。と。ま。り。  
小。文。吾。の。臥。ま。る。も。足。と。芥。一。働。と。搦。廻。り。又。反。久。せ。ぬ。或。り。二。回。或。り。三。回。投。ら。ゆ。  
ゆ。り。輾。ぶ。り。の。腰。を。折。り。れ。頭。を。傷。ら。れ。齒。と。折。り。血。と。出。り。各。々。罵。り。騒。ぐ。の。ミ。然。る。を  
と。も。三。人。数。る。の。け。れ。ば。跡。が。う。ま。を。累。り。ぬ。と。捕。ま。り。足。を。抱。縮。め。く。押。へ。く。索。を。ま  
被。り。け。小。文。吾。の。あ。ひ。ひ。け。り。か。る。も。込。込。の。縲。縛。は。怒。る。声。を。絶。り。立。て。あ。ら。ぬ。甚。麼  
る。狼。藉。を。犯。せ。る。罪。は。死。の。を。浪。人。も。と。も。兩。刀。を。腰。に。帶。く。某。一。言。半。句。の  
他。法。も。な。く。索。を。被。る。も。や。あ。の。そ。の。よ。う。と。敦。圍。る。声。も。曳。せ。ぬ。一。箇。の。武。士。の  
捕。ま。の。頭。人。も。べ。し。朱。鞋。の。兩。刀。の。め。く。野。装。束。も。十。と。と。携。へ。進。出。立。對。ひ。て



小文吾を乞と睨ま。この癖者既よち事のおよ及る。陳むればと免されんや。  
汝のむら。當家ゆく給失ある。古代の名笛わく。山とい尺八を隠し持りと密  
訴のりけり。口この一條のさる。縁故を原る。汝の昨夕阿佐谷里人並四郎  
許宿投り。夜食腹のよた。技よ誇て件の笛を竊。さう。出せ。吾は並四郎  
訝る。この尺八も千葉殿ゆく。十六七年むり。今も年々御示さ。て。常ね  
あふ笛は似たり。要時某は。貸る。と。ちの筋へ。と。ま。り。く。い。く。相違。さ。り。め。る。く。  
よ。死。價。を。い。く。ま。あ。ら。せ。ん。と。い。れ。て。駭。く。汝。が。穢。悪。い。く。醉。る。体。よ。り。七。る。果。い。誼。  
嘩。事。托。せ。く。口。一。刀。小。並。四。郎。が。細。頸。丁。と。敷。合。落。く。逃。去。ん。と。し。て。け。ん。  
わ。の。の。女。房。船。虫。の。持。は。怜。悧。た。り。の。ま。れ。が。怨。心。を。見。せ。ば。言。如。此。々。々。は。汝。  
賺。く。そ。の。俵。苗。め。く。走。ら。せ。む。並。四。郎。が。亡。骸。を。竊。り。寺。へ。送。り。人。為。ま。く。菩。提。  
所へ赴人といひあり。久く宿所をもち出。杖。村。長。許。ま。り。才。く。箇。様。々。と。止。告。る。小

よ。ち。れ。の。亦。毛。檢。の。為。數。兵。ホ。と。れ。く。五。七。日。當。村。よ。出。役。く。彼。死。し。宿。の。わ。  
ま。れ。ば。皆。捨。り。起。出。く。肩。船。虫。が。訴。と。み。づ。く。巨。細。は。聽。定。め。謀。し。合。せ。彼。女。  
房。を。宿。所。は。以。て。く。あ。の。死。を。ま。り。と。ス。く。望。た。不。肖。れ。も。千。葉。家。の。眼。代。  
畑。上。語。路。五。郎。高。成。が。今。に。漏。さ。る。天。の。綱。車。は。伴。小。蟠。螂。の。要。時。ハ。臂。を。振。り。  
とも被。る。素。の。嚼。へ。る。ま。ま。縛。め。れ。ば。既。ま。ん。や。早。虫。よ。も。勢。半。く。首。は。別。る。  
時。節。ぞ。必。ひ。絶。く。假。名。実。名。を。の。身。の。出。丸。團。郡。笛。と。盜。り。當。時。の。形。勢。箇。  
様。々。々。と。首。伏。せ。阿。責。の。苦。痛。を。脱。れ。ん。と。く。ま。せ。び。ん。と。辭。せ。さ。し。く。  
譴。問。へ。も。小。文。吾。驕。ぐ。氣。色。さ。く。あ。ら。も。う。る。死。誣。言。く。れ。某。ハ。下。総。行。  
徳。の。民。の。子。小。犬。田。小。文。吾。悽。頼。と。呼。ぶ。り。れ。此。度。上。毛。へ。赴。死。る。ま。さ。く。伴。侶。を。  
失。く。ま。あ。ら。せ。の。地。は。ま。あ。ら。の。始。を。い。は。如。此。々。々。之。終。を。い。は。箇。様。々。々。と。  
高。屋。畷。の。野。猪。の。り。又。並。四。郎。は。誘。引。れ。て。下。宿。を。彼。死。し。曉。を。折。並。四。郎。ハ



小夜深く。路費の金を奪入。為は還る。首を喪ひ。縛の趣如此々々。とある。

生る。小次第乱れ。その折女房。船虫が。いつう。ハ。齒様々々と。贈り。一。笛の。

までも。述す。辨の。朱女。ま。説訖。らんと。ま。程。ま。ま。枉。係。棟。の。樹。の。陰。より。

出る。船虫。へ。遠。く。語。路。五。郎。が。前。面。ま。つ。わ。く。涙。ぐ。刀。袷。連。必。の。偷。児。が。

辯。舌。ま。迷。され。く。鷺。と。鴉。と。諺。ま。あ。ひ。そ。う。た。て。め。り。が。い。ら。う。と。秋。現。あ。そ。ろ。

一。死。口。ま。り。よ。朝。榜。ま。り。れ。た。ま。り。論。より。證。拠。は。何。く。ま。り。憚。ま。り。その。行。

包。と。披。た。く。笛。と。齋。さ。び。つ。と。實。事。秋。虚。言。秋。それ。が。證。拠。ま。は。く。ま。り。と。声。戦。

一。と。怨。ぶ。れ。バ。語。路。五。郎。領。た。く。その。怨。ま。い。さ。る。と。ま。り。汝。ま。い。り。ま。す。ま。も。ね。し。

や。よ。夥。兵。連。の。癖。者。の。賊。物。を。ま。く。あ。く。と。取。り。て。ま。り。披。く。行。包。の。内。より。

出。る。笛。ま。り。一。尺。ま。り。の。鹿。角。の。残。灰。の。他。の。思。見。一。兩。衣。の。外。物。も。あ。る。ま。

け。り。と。ま。り。い。ふ。と。ま。り。迷。ひ。解。ぬ。語。路。五。郎。より。船。虫。は。ま。り。又。居。て。ま。り。

そ。と。う。の。有。と。ま。り。を。ま。り。尺。八。ま。り。の。忽。地。滅。る。如。く。且。驚。馬。は。且。示。れ。て。面。を。皺。め。頭。を。

搔。た。り。骨。々。一。し。を。今。ま。り。人。あ。生。る。より。も。ま。り。あ。く。く。黄。磔。を。舐。り。ま。り。啞。

子。も。め。く。や。こ。ま。の。ま。り。疑。ひ。釋。が。り。ける。當。下。犬。田。小。文。吾。の。左。右。を。信。と。見。

久。の。く。各。位。何。と。ま。り。あ。ひ。る。嚮。あ。も。り。を。報。る。如。く。その。夜。さ。り。船。虫。が。言。葉。

巧。ま。り。彼。笛。を。先。祖。相。傳。の。り。け。と。ま。り。其。ま。り。贈。ま。り。る。事。の。虚。実。も。心。の。邪。

正。も。ま。り。知。る。より。ま。り。ま。り。ま。り。と。穢。れ。る。人。妻。の。その。ま。り。今。何。を。

受。く。べ。死。仇。ま。り。と。の。ま。り。ま。り。推。辨。は。許。さ。ま。り。姑。く。その。意。は。任。り。ま。り。介。

後。渠。の。菩。提。所。へ。と。ま。り。出。く。あ。た。る。笛。守。の。程。件。の。笛。を。臂。近。る。板。厨。の。内。に。

遣。し。置。た。り。され。ま。り。笛。を。包。て。ま。り。行。杖。の。形。初。は。似。が。ま。り。蚊。遣。火。

盆。も。燃。残。ま。り。枯。木。の。枝。を。卷。籠。け。ま。り。俛。肩。ま。り。ち。拭。く。別。れ。て。彼。奴。を。

立。出。り。欺。く。ま。り。似。れ。ま。り。濁。り。ま。り。深。ぬ。心。の。潔。白。ま。り。至。て。正。ま。り。知。る。彼。尺。八。が。



船虫が先祖の送愛よのむと並四郎が竊と領主の穴を敷敷敷るれば  
年来少く秘死けんそれを吾侪に贈りてへく魚の賊と訴く其罪の陪れ  
夫の怨と復さんとたくみ賊婦の邪智奸計あそべ嗚呼懼ふこの外あも  
亦證據のりその行状ある太刀迹の夜より並四郎が某ると思ひて  
小横の上より刺徹する雨衣さへ破れりゆても感ひのまじく船虫を  
留めおろく西二名の夥兵連と渠が宿所へまうし錦の囊に納る俵ふ  
笛の板厨の裡面よあん又並四郎が刺徹する太刀迹の蒲團とんも席  
薦をさても定めて紛れぬうもゆれば今さら躊躇ふところのつれて畑上語路  
五郎の慚愧と勝む夥兵下知く且船虫をうち成らせ遙後方はゆり  
る村長を案内小立くゆり小又西二名の夥兵ホをさぐりて並四  
郎が宿所よ到く屋捜せよと下知け且くと夥兵ホの村長共侶ゆり

まの跪坐に報るま其ホ並四郎が宿所を展檢し七けるふ笛の果して編  
室ある袋戸棚の裏面よゆり又並四郎が亡骸の如此々々ありこの餘蒲團と席  
薦の太刀迹人の出入せん為小軟砍落たる彼壁の為休まるまはとくまの  
犬田とやうんが口状と吻合せり先を名これを巾覽せよといひ一人さ寄て笛と  
遞与せし語路五郎の囊の紐を解きてゆりて本末とらんひうえり  
大死小駭たこの樺巻といひ歌といひあ昔年故ありく紛失する當家の  
重宝嵐山の一節切は疑ひる原來件の並四郎はこの笛を竊るれば船虫が  
奸智りそ夫の怨と復さんと謀りよの事頭れく失る笛の出ると奇々々々  
と小藤を敲く只管感嘆あそける船虫の小文五郎の伎倆のうらを鉄れる  
あま至く一言半句も諍ひ証するのるけれ怒まる眼小朱と沃く克相悪  
鬼小異るる帯の間は隠る準備の魚切庖丁と逆み合せて肉けり良人の





大傳六車卷二

七 浦泉堂



西の東  
縛せられ  
小文吾  
を蹴挫く

大傳六車卷二

浦泉堂



雙言歎と叫びも果む跳り出走り菟縛められ小文吾と駁んとするを夥兵們  
驚駭立塞りあや狼藉不敵之鎮と制されども耳のむけど突退る  
女流は似ける氣暴早刺進む前勢ひと且その刃は辟易しく左右なく  
搦めぬるける透とゆふと船虫の小文五目目くく突懸る刃を外身の翩し捕  
壓へんふも両のみの背よかる縛の索も心も紊れぬ大勇避る刃尖あちと再三  
つら疲勞と足と蜚しくとと隈角舩と孰る力士の突衝は船虫の要時  
の堪む弱腰撲とく横さるは撞と轉ぶを起しも立む片足は林と踏まへり  
これぬを弱船虫の虫をりる息垂絶小血の氣の失く全身も眼も白く  
まゝ苦痛間さる程もわらむ夥兵小面るげ小食うち聚ひ立代すく  
重索被る船虫と引起しく推居ける當下烟上語路五郎小文五目縛の  
索をもち解祛く傍は請とく辭を改め嚮ゆる玉石のまぐ分れむ片

言以獄を折めんとや疎忽の一條今ゆり謝まるふのまりのり就中  
所邊両と括れらる猛悪の船虫と拵死のひる武藝とのひ旅力とのひ當今  
得か死勇士よと並四郎ホ積悪世覺れ喪る苗の多ふ入るのみみ是  
所邊の呪のれれ宜く吹嘘いま下所邊官途の情願あり武者修行  
るとああら今より當所は杖を駐めりしが主君千重木殿は仕へぬと可  
いれて小文五口うち微笑とその罪よむむしく辱めを受すと以ども犯人立  
地よゆられ疑ひを解れり然びこれなまほのる浮浪人ゆゆと然とて  
仕官の願はるむ此度の旅もなりなく同行ホを失く索遭す欲するの  
所要果るこの死よりと放遣りぬとと推辭を聴く頭をうち掉すい  
今放遣る死仕官のゆいせられ旅客なりとも領主は功あり然とて  
えものけむり立別れ某の後日の咎めを脱れり所邊がゆくと留ると



姑くあつて議まじりむとのひつり野兵が牽居る船虫を佐とてやれ北次郎を  
 抱き自を忘れはけ非義の怨をりて大田ぬを轂んとせしり野兵を  
 救ふ女流とてい侮まじく不覚の働ををこれども、さうみづう、逆へ敷く捕  
 との易し、これども特は大切なる由を損ふとのや、とてさう遠慮せし、小文  
 吾とのを勞し、つても挑む、陳る、牧身より出る、縮鎧は縫もえ、現天  
 罰ぞとみづうと思ひ諦め、わう、山の尺八を並四郎が、編る事の顛末同  
 類も、首伏せむやと責問へ、船虫の低俯る頭を、擡り、冷笑ひの、ゆめ、  
 向扶ふ勢ひを、威せ、さうとて、吾侪は、ゆるむ、同類の名を、さうとて、  
 うち出よ、難くもの、ねど人の痛ま、さうとゆ、んと、さう、さう、情緯の  
 あり、を、知る、由家老、さう、向の、親疎、人の、鈍、さう、と、い、せ、も、ゆ、語、路  
 五郎の眼を、睜、し、肘を、張、り、怒、る、声、を、戦、く、慮、外、の、嘲、哂、大、膽、不、敵、是

奴飽まで鞭懲さむ、輒く実を吐くもの、さう、責よと、敦、圍、く、折、か、ら、高  
 や、村長、走り、ま、く、刀、拵、を、知、り、刀、口、れ、む、や、守、火、小、鳥、獵、の、為、と、  
 今朝も、脚館と、さ、さ、さ、の、ひ、く、を、遣、遥、く、さ、や、お、ん、間、も、遠、く、さ、の  
 おん、あ、ろ、の、の、く、り、や、と、輒、く、小、驚、く、語、路、五、郎、の、野、兵、下、知、り、船、虫、を、阿、佐  
 谷の村長許牽りて、さう、又、大田、小、文、吾、も、さ、う、宿、所、は、伴、之、酒、食、を、差、を  
 歎待せよと、阿、佐、谷、高、屋、の、村、長、ホ、も、言、葉、せ、り、く、分、付、て、僉、共、侶、と、追、立  
 遣、し、その、刃、の、道、次、の、の、わ、く、主、君、自、胤、の、過、り、の、を、遙、く、さ、を、待、程、の、千、葉  
 以、自、胤、の、鳥、網、吹、箭、糲、羊、を、と、て、近、臣、ホ、も、持、し、四、五、十、名、の、後、者、を、後、小  
 後、先、立、と、さ、る、さ、の、も、み、近、つ、た、の、ま、眼、代、畑、上、語、路、五、郎、が、道、次、の、額、つ、た  
 の、さ、う、さ、う、の、を、訝、立、留、り、近、臣、と、て、故、り、や、の、と、問、せ、さ、う、の、語、路、五、郎、を  
 せ、る、く、小、膝、を、進、め、く、並、四、郎、船、虫、ホ、も、惡、事、の、顛、末、を、始、と、と、旗、人、大、田



小文吾が智勇の働に如此々々とすもも入るわりの山の笛のりまぐ送  
るく告まうし一件の笛を懐よりさう出さ返すあつたれが自胤のつぐの毎  
駿元嘆し且歡くあつる笛を囊より出さうちるをうち載せられ弱冠の比  
謬く小條落葉の両刀とこの笛とを失ひより年々小徇知さく才數金  
懈るなればあや盜賊もさく頭れ復この笛をさるめ熱い何れこれよま死  
彼船虫とるの賊婦と緊く鞆向あつらん等しく失る両刀のぬさび出する  
りもあつる。これ件の小條落葉の先君相傳の刀よあつる只假寐の秘藏の  
笛當家の重宝なればこれ岷山の片玉は勝るあつるをその盜賊のさる知る村  
年末をりしを汝も亦村長ホもけまて絶く知らざるの怠慢の罪ありとど  
此度の功のく償ひゆせんはゆめも彼犬田小文吾とやらんいさくゆる死智  
勇の武士とるの浪人あつらん左も右も説勧め當家の股肱となせる

わは是汝達が忠るるは獵をま小鳥よりその大鳥を獲まほしけれと  
あどもあつるのよう馬加大記は報知く渠よりあつるあつるよ帰城せん  
比及まで犬田と厚く管待くあつるあつるをよめれとせよりと叮嚀ふ  
あつるあつる床几をさち衝と立とたは近臣小笛と持し真管成義輪の  
く過りあつる語路五郎あつるあつる汗を流さまよひ恐れ且恥て目送  
る半响あつるあつるあつるあつる膝の塵埃を拂ひ村長許赴たる事孰  
る夥兵兩名と石濱の城小還し七長臣馬加大記常武事事の趣を報知せ  
その使のつりあつるあつるあつるあつる勧く小文吾を款待し程よ秋の日既にか  
むきで末のあつるあつるあつるあつる石濱遣しる両箇の夥兵久りあつるあつる  
馬加殿の宿所よあつるあつるあつるあつる口状と演し且く執継の若黨とあつるあつる  
旅人犬田小文吾を語路五郎伴て城中へあつるあつるあつるあつる又賊婦船虫とあつる



村長亦預け置て翌七獄舎に繋ぐべし。此の如く相計ひ先村長も此  
と傳られていふ語路五郎領たかくの如く相計ひ先村長も此  
ゆと傳られていふ語路五郎領たかくの如く相計ひ先村長も此  
ゆと傳られていふ語路五郎領たかくの如く相計ひ先村長も此  
ゆと傳られていふ語路五郎領たかくの如く相計ひ先村長も此  
ゆと傳られていふ語路五郎領たかくの如く相計ひ先村長も此  
ゆと傳られていふ語路五郎領たかくの如く相計ひ先村長も此  
ゆと傳られていふ語路五郎領たかくの如く相計ひ先村長も此  
ゆと傳られていふ語路五郎領たかくの如く相計ひ先村長も此  
ゆと傳られていふ語路五郎領たかくの如く相計ひ先村長も此

水の河は留る心持のまれば今ゆる勢ひ推辞むくもあつて心持の  
栗の志願くさる兼引けり。此の如く相計ひ先村長も此  
ゆと傳られていふ語路五郎領たかくの如く相計ひ先村長も此  
ゆと傳られていふ語路五郎領たかくの如く相計ひ先村長も此  
ゆと傳られていふ語路五郎領たかくの如く相計ひ先村長も此  
ゆと傳られていふ語路五郎領たかくの如く相計ひ先村長も此  
ゆと傳られていふ語路五郎領たかくの如く相計ひ先村長も此  
ゆと傳られていふ語路五郎領たかくの如く相計ひ先村長も此  
ゆと傳られていふ語路五郎領たかくの如く相計ひ先村長も此  
ゆと傳られていふ語路五郎領たかくの如く相計ひ先村長も此



けいへ村長の先逃る。莊客們を召集め。地方の里人。二三十人。駈催して  
 舊所へも死ぐる。人影の多くて虫の聚く。小草の上は断棄。捕索する。送り  
 くる。原來を船中を奪ひ去れる。あや同類の悪棍。所為する。と  
 ども。その一人。捕ぬれ。まう。釋は立る。かんに。路傍に。額を  
 集め。商量。小夜深。折衷前。勘再。説知。上語路五郎。高成。大田  
 小文吾。伴。その日。晡時。石濱。へ。来る。長臣馬。加。大記。常武。宿  
 所。赴。有。功。の旅人。大田。小文吾。を。帰城。の。報。常武。老  
 僕。大田。と。旅人。と。客房。を。休息。さ。上。語路五郎。今。出。對面  
 する。とい。老僕。の。果。か。畑。上。語路五郎。の。側  
 なる。漏室。の。の。の。侯程。小秋。の日。も。没果。り。當下。馬。加。常武。の  
 君黨。燭。を。秉。し。土圭。の間。小坐。口。の。と。語路五郎。

阿と。忘。膝行。頭首。の。隔。敷居。と。躑。も。生。り。  
 並四郎。船中。の。顛。木。且。犬田。小文吾。武勇。の。又。阿佐。谷。の。田  
 中。の。尺八。を。主君。自。亂。進。ら。る。舞。の。趣。如。此。々々。と。尾。  
 演。常武。の。冷。咲。ひ。の。並四郎。の。叔。小文吾。を。殺。さ。と。謀。り。  
 一定。の。件。の。笛。の。失。昨。今。の。あ。廿。年。の。迫。け。必。も。並四  
 郎。の。賊。の。定。め。り。贖。物。と。さ。物。買。ふ。も。あ。を。さ。れ。か。も  
 俺。の。逃。速。く。俺。們。告。告。中。途。主君。小。時。の。贖。件。の  
 笛。も。俺。們。の。途。中。主君。小。進。の。鳥。啼。の。越。度。と。や  
 いら。の。職。の。あ。の。自。計。ひ。これ。長。臣。と。悔。も。當。家。の。法。令。  
 建。奈。何。々々。と。声。高。き。の。懲。さ。れて。語。路。五。郎。頭。を。席。薦。は。瘠。の。返。と。  
 舞。も。の。け。の。常。武。呵。々。と。笑。ひ。て。和。殿。が。出。來。過。す。け。の。小。限。ら。ね。



此度のりへ用捨を捨ててこゝに又後日小議をなさば彼船虫のいふまゝると向は僅小  
頭と擡さしぬ其義の某夥兵をて下知と伺せし大田の多くを多れ船虫の村  
長の預置くをよめれその故の如此々々と兼く以て彼処へ送り置るる事  
せも果して常武のゆび声をゆり直ぐその甚くは錯謬をひひつら然もあは  
船虫の牽りて来よ大田の長途の疲勞もあんな今宵且村長許首をせし  
めれと口を何とぞゆびしる願は彼船虫の女流の飲けるは癖者る武藝系陳  
農丈亦小任と捕も逃しぬ笛と共に紛失する小條落葉のあつた  
索るよるる使に立る夥兵亦が使違ふとありとも二歳児も思入理の當然  
その職に居てかものつらむ大くは罪人を号し失ふは抑誰か越度を  
和殿みづり彼処に赴たて船虫を牽りて取りて今宵獄舎に轂をひき  
脱れりさそむと縋り又止論議は小夜の更すも語路五郎は只權威小怖れ

隻言一句も陳の理と非は枉膝節の折るをり居縮まる瘠痺の京登  
らむともなる阿佐谷村の過ををく勸解する宿所をのり猛  
兵の響聚合く石濱の城戸を出ると総泉寺の鐘鏝々と夜の冬更す

第五十四回  
常武疑く一犬士を囚ふ  
品七漫よ奸臣と語説を

却説畑上語路五郎の蕉火の路振照を夥兵ホをて阿佐谷村へ赴く  
程よこの時六七町は過ださるれば人のまゝ前程の小草折敷で何れやえ  
豪々とうち相譚の声しければゆくまろは怪らる近づくも小呼かけくその何  
れぞと咎まは是則別人るは阿佐谷の村長が莊客們とあは聚合の  
會談とまるるけり當下村長のと面をり立ゆく道次は額とつ死湊眼代さ  
某未と救せぬとち勸解れが莊客們も異口同音小か慈悲を仰た



救つせあへと叫ぶゆを語路五郎訝まき汝ホハ船虫とち成まをきま何等の  
 故ホホハ聚合は且つれをえて救ひを乞ふ一切のあつとぬむわひつ狐ハ  
 魅されつ然然とふ汝ホハ狐を魅さんと欲まるともこれ豈と樹ハ乗せり  
 れんや疾正鮎を頭ささる目よりれんせんさうちの刃の柄の權をくり小握  
 詰てを睨まする氣色小呆り村長ホハ忙慌を抗ぐ御眼代さる早らせ  
 める狐の所為でいひらば察まる所同類の悪棍ホハ所るる一嚮ハ船虫を  
 おく糸れといふあ入下知状とあり一殊さう夜行の用心とてこの甚客們八九  
 名と彼罪人を守護しつこの処まぐある程ホハ杜の樹蔭より許多の癖  
 者頭れ出く或ハ鳥銃或ハ白刃得物々々とうち放うち振り莫馬直ホ  
 敷んと候これより後とまうほぼともれ推量ホハ定まるべ一扱近死里人ホを  
 駈催し加勢とくゆびあよまくるれハ人ひとりもどかそ只断捨る捕

索の小草の上は透り一の既まを船虫と奪ひ去られて刺癖者ひとりも捕  
 れざれまう一釋り立ちかんのつよさまと額を集めく商量果一ま折り  
 思ひろりまは処を過させぬま度と失くまうさえとの後前り一の恐れ入つ  
 告る小駭く語路五郎ハ殺兵ホと面をえ合して呆りと半晌をり忽地声を  
 苛立くを甚胡乱とこれ決と船虫とぬくとあれといふ下知状と遣せりま  
 その状ゆびさるせよといわれて村長遠く懐袂犢鼻褌を搔撈まきも  
 揮ふてても鼻紙ささるりけり悲や嚮は逃るとれふり落せりつと起つ  
 月と燭は彼此と草推つたて索れまきく焦燥語路五郎頻り小轟つ霹  
 靂火の隊ま如く声やり幾く是奴逃とく逃さんや汝ホ不覺ハ船虫を捕  
 逃せりあつとまうと同類ハ相譚れ渠と落とさぬく虚言をほうまぬらん  
 夜と犯して出てまするも馬加殿の指揮まうと彼罪人を翌迄まぞ獄舎ハ敷  
 八才傳六車卷二



為るる小汝ホガ越度にて連係せられん朽をさよ一人も漏さず縛めまると烈した  
 下知は夥兵們齊一撥とま蒐く村長共は十人許數珠繫糸ゆてけれぬ皆  
 面色米の如く戦慄れて歯も合ぬ口小唱念佛と囃ま蚊の鉦鼓三宿不  
 妻子のま虫とゆて鳴々鈴虫のま人回忘報過世の業と悟るがおりひさりくま  
 翌のこの野の虫より先ぬ滅んとうち歎く追立させを語路五郎の石濱の城よ  
 帰るとまくその夜の中は村長ホと皆獄舎を敷合せけりてくる程まを曉くま  
 るり一語路五郎の馬加が門戸を敲入のさげがゆく翌を告めとまひつ雷安時  
 臥房入りより既小天の明日の昇て己の比及あるり一六遅くをけりと忙々く  
 衣裳と改めく出るゆま馬加常武の既まを向注所は在りとお悔しくこれを  
 召る使遣ぬ胸うち騒ぐと鎮めもめ使ともま常武のまを待  
 こびり彼船虫といふまると問れて語路五郎蔽ま由ま村長ホが不覺ま

船虫と癖者小太専まされとの一條をわたくし報知く彼村長も柱客  
 ホも緊しく禁獄せゆり。同類と穿鑿せの船虫を捕へんとも遠くは  
 こゆり。このまも果ま常武の勃然とく眼と瞪し。これにそのまを飲  
 船虫をまきり。村長ホが罪輕ぬぬらねと渠が宿所は留め措て縛を  
 等閑致し。和まが罪のゆき重り誰の目も奴をまく搦めばと呼り  
 声小當采由の若侍小西二名向と応てまを語路五郎を縁頼より権落  
 推伏せく忽地索とけり。常武獄舎小送りてまが陽光も入せり  
 けり。所程は阿伏谷の村長柱客ホが親族妻子の事の趣と傳て駭歎  
 くと大くまを日と母石濱の城まありと哀と訴へ或の田を售り林を  
 售く。竊小馬加主後ま物のみ贈り。大く約一月まを麻で村長ホの  
 辛く。食禁獄を免されり。只如上語路五郎のま。この恩赦ぬぬら



獄舎の中よりけりければ、これと憐むものなり。又識るものなり。渠の年  
 末氏の膏腴を統する悪報あり。馬加殿の髯の塵と採損なり。憎む。  
 可憐命を損ぬ。と竊ふこれを評する。れ。妻も迫る世を去る。歎きを  
 送る子もなれば、口親族と朋友等。その亡骸を葬りけり。是より先千葉  
 女自増の失せ年。一嵐山の尺八の入り。その日の夕。帰城。彼大田  
 との時え。勇士の心を告成の常武。告る。欽。渠と當家は。笛める。千騎も  
 優る。と。對面せ。これとある。よ。思ひ。長臣。小。も。出ぬ。小  
 召。出。ま。き。う。の。ま。け。れ。ば。且。黙。止。る。程。は。次。の。日。馬。加。常。武。の。ひ。り。後。堂。小。見  
 参。り。と。名。笛。ゆ。び。宝。庫。小。返。り。悦。び。を。述。ぶ。且。阿。佐。谷。の。村。長。等。が。  
 謬。で。船。虫。を。ま。ら。し。る。緯。の。趣。并。小。畑。上。語。路。五。郎。が。罪。科。の。の。箇。様。々。と  
 咄。え。の。け。て。渠。ホ。の。禁。獄。せ。り。え。り。八。支。部。と。彼。船。虫。と。駈。索。ね。が。追。捕

輒く。縦。往。方。の。ま。れ。む。と。も。原。是。匹。婦。の。り。る。れ。喪。家。の。狗。異。る。と。て  
 終。め。み。つ。く。驚。れ。ん。賢。慮。の。あ。け。の。ひ。と。異。も。る。げ。と。ま。う。と。自。自。増。で  
 眉。を。擧。め。失。る。笛。の。復。と。と。も。同。彼。賊。婦。を。鞠。回。せ。小。條。落。葉。の。西  
 刀。の。ぞ。あ。る。と。も。の。の。り。小。語。路。五。郎。が。疎。忽。小。り。て。村。長。ホ。が。過。失。の。禁。獄  
 り。れ。も。法。は。當。も。り。あ。り。の。り。の。賢。君。の。古。田。石。物。と。宝。と。せ。良。臣。賢。者。と  
 貨。と。と。と。尚。書。小。本。文。を。え。る。と。も。や。か。れ。ば。予。が。欲。ま。る。の。の。ゆ。り。山。の。笛  
 よ。り。も。小。條。落。葉。の。大。刀。よ。り。も。彼。犬。田。小。文。五。郎。の。渠。ホ。が。野。猪。と。搏。か。る。  
 又。並。四。郎。小。行。包。を。刺。せ。く。輒。く。これ。を。敷。き。笛。め。又。船。虫。が。贈。り。る。笛。を。送。り。く  
 奸。計。の。抄。を。缺。れ。大。勇。明。智。賞。賞。感。尤。浅。く。其。方。も。亦。この。あ。る。の。で。族  
 館。の。管。待。等。兩。る。と。の。勸。め。當。家。小。仕。へ。さ。せ。よ。遠。く。召。よ。せ。對。面。と  
 ち。の。の。の。と。回。り。て。當。武。小。藤。と。進。め。仰。べ。ゆ。と。も。彼。小。文。五。郎。の。を。あ。り。の。ふ



並四郎は鎧を刺れて弱り果て野猪を撲殺すも日勿く又並四郎を  
 害せし欺敷を多く柄あるを就中彼笛の小文吾が所持せしゆ後  
 難と思ふより竊小板厨へ送り置たり故これも亦知るべからばおれは先船中  
 訴出が実事を小文吾が陳する所虚言せしものさ故りきりさうん船中が  
 冤枉を憐むるの罪を奪うてさうん船中既に遠電と再度の糾問は  
 ようみけれ何をのくこの疑ひを解れぬき然る今更小文吾の御對面の  
 むい物体多くをいつめと憚る氣色もあまうさうさう自亂且く沈吟し  
 りる趣理るはあなれどその疑ひ人より郷向小文吾が進止を待たせ  
 つくその人とのをせよ詭譎とりて人と虚げ廢教を言と求く恨幸を欲する  
 のゆゆらば再三再四の勅辨をそのまはけれと宣へ常武の心を  
 感ひの愛する憎むる深きに起り綴小文吾智勇ありと言と行の

正しくとも尙敵国の間者多く怖るべきゆゆらばその故郷に下總へ行  
 徳とりののれとて孝胤ぬくの腹心は時葉の城に然るま里見欽  
 許我殿成氏の間諜者多くいん凡智勇は捷き人の人を用る戦國は  
 主とりもせむ虚々と諸國を流浪せんゆゆらば今愚意をりく  
 致んぬく小文吾を獄舎に囚へて重く責懲しよく敵の間者多く  
 首を河原に殺梟て後末を成むは是當家の武威を示し第一義は  
 こそいと言葉巧は説破れば自亂ぬび沈吟して敵の間者と間者やう  
 ぬら宜し測りつと父も假染る功ゆゆらば賞せむと訓せんゆゆら  
 よろし沈吟ともおもほはる事真偽の知る限り只りすも置置  
 日毎の郷食応答の閑るさうさうや敵國の間者多とも志を轉して遂は服  
 後するらんこれより外おせんまると又他事もさう宣へ常武終は拒

ハナ信六郎巻二

ハナ信六郎巻二



難く。去りて。彼小文吾と某は預け。衣食の賜の。あるを。重平と真偽を。辨り  
 ぬらん。といふ。自亂。欺し。げ。小疑心。暗鬼を生む。といふ。疑ひ。なる。ありとも。同僚。同  
 會。議。と。疎忽。の。相計。ひ。ま。り。と。做。め。た。す。を。常。武。の。生。忘。し。て。退。出。け。り。あ。り  
 程。小。犬。田。小。文。吾。の。日。より。一。七。馬。加。客。房。に。留。め。られ。朝。夕。の。饌。を。呈。上。せ。り。外。の  
 訪。慰。心。の。れ。も。あ。り。も。對。面。せ。る。こ。ろ。に。ゆ。く。あ。ら。小。訝。り。胸。安。く。旅。宿。の  
 床。に。昨。と。こ。ろ。一。今。と。旦。せ。一。日。も。千。載。の。異。ね。と。真。愛。を。奉。り。せ。り。け。り。か。く。と。第  
 三。日。小。至。り。家。の。老。僕。抽。角。九。念。次。と。呼。ぶ。ゆ。め。小。文。吾。は。何。と。ま。ま。主。人。大。記。の  
 口。扶。ゆ。く。ゆ。ま。う。づ。の。勢。を。暖。ま。て。宿。所。を。る。と。稀。さ。れ。ば。欺。待。も。さ。疎。る。ん。を。  
 許。さ。れ。る。者。ひ。る。へ。け。り。あ。く。半。日。の。閑。暇。を。ゆ。く。ゆ。め。對。面。し。ぬ。ん。と。い。は。れ。り。  
 誘。ふ。と。い。ひ。け。て。先。に。立。り。同。毎。の。紙。門。を。押。開。々。々。と。奥。ま。り。り。小。書。院。に。お。て  
 ぬ。程。小。馬。加。大。記。常。武。の。縮。羅。の。單。衣。に。精。好。の。袴。を。穿。て。聖。柄。の。短。刀。を。横

佩。年。十二。四。三。童。扈。使。は。大。刀。を。持。し。後。方。に。侍。り。一。二。間。の。樓。林。に。背。お。し。て。  
 優。坐。半。し。り。その。縁。頬。の。肥。く。色。黒。く。力。士。め。だ。る。若。黨。四。五。七。名。焦。布。の。袴。の  
 袴。取。り。各。々。二。尺。の。刀。を。帯。り。巨。内。刀。を。帶。り。肘。を。張。り。肩。を。怒。り。こ。ま。こ。ま。と。ん  
 中。へ。る。眼。睛。素。破。と。い。は。れ。組。も。伏。せ。ん。と。い。は。面。構。を。さ。り。馬。加。大。記。の。馬。加。大。記。の。馬。加。大。記。  
 威。權。の。主。の。自。亂。十。倍。を。る。形。を。一。當。下。老。僕。九。念。次。の。遙。よ。の。ト。の。方。に。向  
 ひ。く。是。る。人。犬。田。小。文。吾。ぬ。し。ゆ。と。謂。を。執。り。退。く。程。小。文。吾。の。進。を。紙。門。の  
 裡。へ。り。恭。し。く。額。つ。た。れ。ど。も。常。武。の。只。膝。を。加。え。り。の。ま。や。く。礼。を。復。さ。す。に。  
 側。に。措。る。扇。を。取。り。ま。へ。く。と。呼。近。つ。は。小。文。吾。の。肩。に。舊。の。刀。を。懸。せ。り。然。と。そ  
 臆。せ。り。氣。色。も。ま。常。武。と。ち。對。ひ。某。不。測。の。ゆ。ゆ。り。當。所。に。抑。留。せ。り。る。  
 る。二。日。千。秋。の。思。ひ。の。り。ゆ。も。せ。り。け。ん。途。中。同。行。を。失。ひ。く。索。遣。ま。く。欲。す。は。  
 の。之。笛。の。盜。賊。の。の。れ。り。より。さ。る。所。要。申。の。ゆ。ま。り。ぞ。く。放。遣。せ。ん。と。い。は。れ。り。





馬加常氏

白井九郎

白井九郎



坂田金平太

柳田九郎

小文吾

下野季太

水丸吾  
柳田  
常武  
常武  
常武

六才傳子車卷二

六才傳子車卷二



願くそへこの常武領にて愁訴実理り其その誼とて心  
 一に限りまければのふせん自胤和殿を疑ひ多々縛速決めりその故を  
 彼わく山の首の和殿小船虫が贈りて陽受く板厨の中へ送置こり  
 まれも受ると授るると證據一只是のまらるる當夜中途の癖者ありて  
 彼船虫を奪去りぬ是より再びの船虫が首伏の苦痛も堪ぬ虚言ゆく  
 冤枉を憐むもの奪取くまらるる秋これも亦料まらるる是疑ひの二つをび  
 よれぬ加るる和殿の智勇兼備の人武藝も亦雋れり人を用る戦國は往き  
 ろとて售れざり流浪せらるるまらるるの身疑ひの二つを察せぬ  
 千葉の孝胤の向者るる里見秋時我の向謀者るる速小禁獄とるが  
 推量小違ひの首と河原小殺身と武備と隣國小示まらるる君命嚴るる  
 のれり某をく諫めりも真偽明白の證まれば某も疑れり殆寒心

まるとヨリ今且候某方便と旋らるる主君の疑ひを解るる進退  
 その意は儘まらるるといわれぬ故馬小文吾ハ又一層の患ひとるる刺る如き  
 胸膈よさるるさるるも必ひ多々貌を改め必ひけり疑ひの理り  
 とも覺ぬ彼船虫が逐電より還る某を疑れて涙ホがまらるる首伏は實  
 支まらるとせらるる抑ゆる道理を又某を敵くの間者るるといわれ人  
 行徳(まらるる)と彼仇の里人ホは向る舊里ある向老父あり某の五斗米に  
 腰を折れ人の為は刺客とるる初市人今の浪人古那屋が男兒となつ  
 る隠れぬもゆりこの義をのつ今一度某がぬ諫めぬ彼を疑ひと  
 解るる春の水の如き愛顧を祈まらるると只管小請未れは常武頻  
 嗟嘆しての趣みる理ありまらるる行徳の當家の舊領るるの今  
 千葉の孝胤ぬの米邑まらるる敵地といはる輒く人とり和殿の素生とられ



縦回よりわきととも敵地の人の答るを實言と信人の疎るべし。そのあつても  
 今速小和殿を放遣るる。あつちうふ及びく。氣まき時を俟めと親切め  
 せ。便佐利口。うけ引くぐもわふれど。小文吾の愀然と身を又たて心せむ。  
 常武これを慰めく。犬田との時多らむ。近死比の人の歌も。いそぎを濡れ  
 ざうすを。旅人のあしより。霽る野路のむら雨短慮の功を。うら。いそを限り  
 と定り。なむ。ぬ。這。苗のゆるる。小母屋も人の出入敏く。煩し。死のヨリくる。下。奥  
 庭のわね。よ。此。小の幹。浄。房。あり。け。よ。より。彼。処。ふ。起。臥。し。志。を。願。ひ。ぬ。  
 衣食のゆ。その。餘。の。ゆ。め。心。つ。死。さ。き。と。わ。ふ。び。隈。る。老。僕。お。よ。如。此。々。々。と  
 い。ゆ。復。丁。を。對。面。ま。さ。な。れ。と。い。ひ。果。て。身。を。起。し。童。扈。後。を。隨。へ。く。あ。つ。う。ふ  
 奥へ。退。死。け。く。小。文。吾。の。常。武。が。君。命。は。假。托。く。し。れ。を。留。る。と。下。と。既。し。意  
 中。小。曉。り。ふ。け。れ。ば。敢。て。ぬ。さ。び。争。む。老。僕。九。念。次。ふ。誘。り。れ。て。幹。浄。房。あ。り。て

二間の九尺の敷奇屋敷。浴室あり。厠あり。その次の間の席。蓆  
 繰。小。三。む。し。を。布。く。夜。物。と。藏。る。板。厨。あり。ゆ。き。の。庭。より。算。へ。曲。演。水。盤  
 る。と。水。を。洗。さ。る。夏。を。宗。と。ま。れ。び。ゆ。四。目。色。小。咲。く。芳。宜。の。時。も。り。顔。る。  
 神影石の倚る。小松の挿頭。白く。夕日と抱く。寒蟬。いづれの。杉。心。朝。露。  
 消る。丹。鳥。の。の。の。草。ま。り。渴。ま。る。と。死。の。爐。は。百。年。の。釜。あり。倦。と。死。の。庭。は。無。歩。の  
 地。あり。有。敷。系。小。眺。る。な。ゆ。ね。と。惆。悵。る。心。の。真。愛。の。亦。遣。さ。る。も。る。り。け。り。この。処  
 二。方。の。築。垣。あり。と。南。面。の。諸。折。戸。あり。何。れ。も。も。る。る。亦。異。る。と。常。小。の。ね。と。り  
 鎖。し。う。の。れ。が。罪。る。く。と。禁。囚。の。如。く。旅。館。さ。ね。が。う。獄。舎。小。似。たり。これ。より  
 後。男。の。童。ホ。が。こ。の。の。飯。を。贈。る。と。老。蒼。頭。ホ。が。月。の。中。の。雨。三。日。庭。の。小  
 草。を。刈。拂。ひ。落。葉。を。掃。除。し。よ。ま。あ。る。の。と。ま。れ。の。譚。敵。と。ま。り。も。る。り。こ。の。身  
 小。生。憎。み。過。る。陰。陽。と。ま。め。の。こ。の。小。文。吾。頻。は。焦。燥。て。憂。苦。く。堪。む。天



うち仰だ。いされば枉津日の神のまう移く眞縁く。わくまでよ相をのりなむを。  
 荒芽山の厄難より別れ。四友の存亡を夢ふ。も知やう。ま預けられる両箇の  
 女人の往方。今ふ定まる。も昔里の親のり。怪のり。父の喜ぶ。くあそぶ。べの  
 齡ゆ。と怪の尚鳩車竹馬の年ゆ。有ける。れをひ。彼をど。い。あ。あ。あり  
 と。い。心。四方。ふ。ま。て。ぬ。日。も。る。一。仏。説。ま。す。火。宅。の。煩。惱。苦。海。の。風。波。の  
 此。れ。る。ふ。一。是。併。馬。加。大。記。が。妬。諱。よ。起。り。て。虐。ら。く。と。の。く。の。如。し。渠。の。奸。曲。の  
 小。入。る。り。誠。ま。る。ら。ぬ。大。功。の。細。謹。を。顧。む。大。礼。の。小。讓。を。辞。せ。ば。と。を。ま。り。め。れ。を。  
 の。諸。折。戸。を。推。破。く。出。ん。と。の。難。も。わ。ら。ね。と。の。処。も。鎖。を。披。く。と。の。そ。う  
 城。門。を。出。され。ん。や。勅。し。抑。留。せ。られ。求。く。恥。辱。を。思。ふ。近。し。い。ふ。ま。ま。と。さ。と。  
 胸。小。の。と。思。ひ。く。ら。飛。鳥。の。翅。る。死。身。を。恨。ま。不。樂。音。を。鳴。ね。果。し。る。死。  
 籠。よ。養。れ。て。友。の。る。を。崔。色。時。墓。も。又。夕。と。れ。ふ。り。け。り。か。く。秋。ゆ。き

冬枯れの寂し。死宿。年暮。て。明。れ。い。文。明。十。一。年。春。も。三。月。の。り。く。た。れ。の。と  
 る。と。ん。人。も。も。庭。の。花。の。の。く。る。い。と。美。く。咲。く。程。は。彼。帰。と。る。倉。頭。の。常  
 より。も。あ。も。く。ま。く。日。く。く。草。を。刈。け。り。を。中。品。七。と。い。老。蒼。頭。の。小。文。吾。を  
 訪。慰。め。く。木。訥。ま。る。物。の。い。ひ。さ。る。老。實。ま。る。る。れ。ま。れ。小。文。吾。も。亦。隔。ま。た。の  
 鎌。休。の。折。毎。は。煎。茶。を。飲。せ。ま。る。江。湖。上。の。今。昔。と。ち。か。く。い。せ。せ。時  
 う。品。七。ゆ。く。飲。び。く。稍。親。ま。る。程。は。一。日。品。七。ひ。と。り。ま。の。日。ま。た。ま。の。こ。ま。れ。は。  
 午。餉。過。く。縁。頬。一。片。ち。拭。く。憩。ひ。て。り。小。文。吾。を。勞。ひ。て。又。端。近。う。出  
 づ。品。七。を。品。七。要。時。ま。る。と。い。く。苦。勞。を。あ。め。ふ。あ。や。ま。の。人。の。と。ろ。の。と。け。く。傳。れ。ぬ  
 る。花。の。春。の。百。色。の。病。者。め。た。る。瘦。ま。る。を。え。さ。せ。あ。ふ。ま。七。現。を。護。で。も。の。ん。り。  
 不。測。の。の。と。拘。ら。ら。ひ。て。旅。も。く。人。の。川。田。られ。閉。籠。ら。れ。て。既。ぬ。を。下。歳。ち。う。く。ま。り  
 ぬ。れ。が。いと。痛。く。あ。の。と。又。せん。ま。も。ま。た。の。う。う。人。の。過。世。の。業。ま。ら。く。知。目。者。も。勇。ま。も



趣合多生涯頭と舉難る世よの傳言くりの近くこの武藏も大塚も  
大塚番作といひ猛者の家督を姉夫小横領せられて憤りあや堪ざりけん  
腹を斫て死もひ死その獨子も親も劣らぬ器量ゆりより入るといひていふる  
けんよく知らねと今とその迹絶うとをかれが智者でも勇士でも時小遇ね埋  
れて人の中も知らざるものれゆりさかれ人と七轉八起とよの世話もある不年  
ころく見えぬやうや一年二个月囚徒に等しれも隨意もある日のまはるの  
まよいたく物を思ふ命を縮めるものとよみづから心と長成りゆりて厄の國家を待  
あひの慰められて小文吾の曾ち騷ふと推鎮めゆり趣理ゆりれも亦大塚親  
子の名の縁でゆりや和殿の相識ゆりゆり飲と回れて品七頭とち挿正否  
相識ゆりゆりけれども大塚の里人は糖助といゆれゆり先代より由縁ゆり渠世の  
在り一程へ訪ゆり訊れゆりよゆりその噂ゆりゆり現世間のさるる高き

のれぬのまよいたくの權門馬加殿いとあそる一人もまよいたく毎に苛く謀  
課守守のまよいたくも憚りのあひ甚麼も過世ゆりゆりゆり小文吾と進めて  
その縁由ゆりゆり世の若しは筋あまともゆり他郷ゆりゆりあはるは縁回  
人のまよいたくゆりゆり外へ洩ゆりゆりゆりゆりゆりゆり品七と頭と挫  
ちり四下とゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
さん忘れても洩ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
家二流に分れて合戦ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
高弱冠ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりと薦ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
憤りて成氏朝臣小加勢とゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
馬加陸奥入道光輝と相共軍兵數



見えち 千と引率して同國ヲ胡志摩の二ヶ城と攻潰し 軀て大将胤直ぬふ詰腹を  
切らせし胤直のむ父前千葉公入道常瑞舎弟中務入道不心也奔一おん  
腹をむめされけるを成氏朝臣の沙汰とて陸奥入道光輝の嫡男孝胤と  
千葉公入道不心と千葉の城を居置れ又管領家の沙汰とて康正元年の  
冬のあろ入道不心の長男實胤と三郎胤直と執立て武藏の石濱赤塚の西城を  
居置れし千葉家ゆき二流に分れて互ふるが怨讐言の鏃をふん磨り  
あひけるをゆきいける千葉庶流の郎黨は馬加記内常武といふありき  
孝胤不仕へかその勢過るのりて下絶と逐電し石濱殿へ降参し千  
葉の爲体と演説し奉公無二進止の程は実胤を登用して遂は長臣と  
すあは記内と大記と改めし持し時め栄けるのりて程は実胤ぬ八年來  
病をとりて遁世の情願のり家督を舎弟胤直に譲らしと議ありき

馬加常武承く肚裏より赤塚の城中の栗飯原首胤度龍山逸東太  
縁連との両箇の老黨ありゆれも當家の一族あは就中胤度へ下絶志摩子の  
如來堂も常瑞不心自殺のと死主君と共に腹切する栗飯原右衛門尉公  
るゆりて胤直に縁られし胤直家叔と美嗣あは彼兩人も随ひ來て第一の  
權門とあらん彼もあはつた權勢を削られて外咄々く朽をりゆはなす  
縁連は血氣の杜攸ぬ思慮ありけりね謀るの難くもあはゆめれど心  
憎む胤直度へ要するも密に謀を旋してこれより後時々赤塚ふ  
赴けし胤直の安否を伺ひ栗飯原龍山の両老黨ホと他事ねえき  
交りしは一日常武は実胤の室庫よりあはし山とて一節截を潛やり小こり  
出しこれを懐し赤塚も栗飯原が宿所は赴死密議ありと倡へて  
胤直と胤直の對面し其の某けふ守の仰より

八代傳六郎卷二 四



此度時我殿と西管領家と。え和睦の風聞定之守。わ近々程の家督と  
 赤塚殿をいふ。譲りあんと。思召定められ。いふ。西管領の助力ありといふ  
 とも。今さし。時我殿より。よく思われぬ。いふ。よ。う。づ。小。後。安。う。候。へ。う。づ。され。が  
 彼。ち。ん。和。睦。の。り。せ。お。披。露。れ。先。よ。使。者。を。時。我。殿。へ。進。し。せ。め。ら。げ。後。の  
 為。よ。う。う。か。候。べ。し。され。ども。石。濱。より。遣。さ。鎌。倉。へ。の。り。え。影。護。し。自。胤  
 より。遣。さ。ふ。何。の。り。疑。べ。死。就。く。時。我。殿。へ。進。し。せ。死。牽。出。物。の。こ。當。家  
 本。國。お。離。せ。し。より。さ。せ。る。重。罪。も。う。し。この。一。節。截。へ。乃。祖。貞。胤。の。お。時。より。  
 相。傳。の。の。り。ゆ。く。脚。所。も。知。し。召。さ。べ。ら。れ。が。これ。を。進。し。せ。め。ら。う。この。餘。の。物。も。  
 自。胤。の。こ。ろ。と。相。添。く。ふ。た。然。こ。の。り。尤。密。談。る。れ。が。汝。之。頼。小。胤。度。が。宿。野。に  
 赴。た。く。予。が。意。と。傳。へ。よ。と。仰。ら。れ。て。い。と。實。言。し。や。し。小。説。示。し。し。件。の。由。と。遞。与  
 せ。い。ち。胤。度。針。る。む。教。び。く。一。点。も。疑。の。む。仰。の。趣。有。く。死。す。て。よ。奉。り

いひぬ速ふゆえのげて仰のまふく相計らひ某時我へ赴たて帰城の後彼  
 処の首尾を中上ひりこの爰宜くおん執成を憑もると答へくが常武と  
 謀濟しう。と。と。ろ。の。中。は。含。咲。く。石。濱。へ。も。還。り。け。却。説。粟。飯。原。胤。度。の  
 その日自胤の母より。ありく。馬加常武が。傳。く。る。實胤の密意を演て。件。の  
 笛と進らせし。自胤感悦大く。う。む。石。濱。殿。の。お。ん。計。ひ。某。を。思。い。ぬ。そ  
 かん慈愛あるのれを。い。て。う。違。背。致。さ。き。現。時。我。殿。へ。牽。出。物。は。笛。を。と。り  
 い。く。の。ら。ん。今。一。品。何。を。欲。得。と。お。ひ。ひ。る。ら。向。あ。へ。胤。度。要。時。沈。吟  
 しく。呈。表。し。某。鎌。倉。へ。お。ん。使。を。奉。り。し。折。は。彼。地。め。く。購。得。は。る。長。短  
 二口の刀の。焼。刃。尋。常。る。う。さ。る。と。り。く。と。の。傳。進。上。仕。り。し。小。胤。落。葉。こ  
 る。名。つ。け。ら。し。く。と。と。く。脚。秘。藏。を。あ。ら。う。と。や。彼。兩。刀。了。然。ふ。べ。ら。れ。と。い。ひ。も  
 果ぬ。自胤と頼小領死微咲く。彼。大。刀。の。條。を。忘。れ。し。う。牽。出。物。の。も。



中七 昔物語  
 粟飯原 首  
 航度 誇死の如  
 この本丈ハ三  
 の巻のわらわ  
 首官とやう  
 合せんる下



九傳 車巻二

九三 浦島草薙



救たすひぬ。この使つか立たんのれが首くびあらうと誰たれりとせん。疲つか勞らうあらうとあらいびや。  
まことと亦また他た事こともあらう宣のたまへば溜のり度ぶ荒あ然ぜんとうちに笑わらふ。仰あやむ。既すでにも用もち意いをこ致いたす。明あき朝あ護ご足あ仕しらんといふ。自より溜のり飲ひく。次つぎのま間まに侍り。  
ま近ちか習じゆのもの者ものふらうとゆえに。小こ條じょう落おち葉はのもの兩りゆう刀たうと嵐山さんのもの笛ふえのもの共ともに溜度ぶに。  
ま遍へん与よ一いつのもの溜のり度ぶをうけ。宿しゆく所じよは。退ひ死しす。そのひのち中ちゆうに。  
ま細こ工く人にん亦またに。笛ふえと兩刀たうをは装まら。死しに。相あ兩りゆう二に箇くわん造ぞうす。と。猛まう小せう救きう正せいのもの行ぎやう装まも。現げん戰せん國こくと。逸いつ早そう死し兼けん馬ば持ぢ鎗しやう甲か由ゆ權けん命めいのもの今いま宵せう一いつ節せつ切せつ小せう條じょうのもの雪ゆき飲いん消しやうよ。其その処ところは。落おち葉はのもの兩りゆう刀たうを携ひ。若わか黨たう二に名なと後者ごと。  
まへて十じゆ人にんを。其その詰つめ早そうま。う。のもの辭ことば我われを望み。起おこり。畢ひつ竟せう溜のり度ぶ辭ことば我われ使つかし。と。又また甚しん麼まる。話わ説せつつ。あらう。そののもの卷まき子こ著しやくし。出し像ざうと。あらう。大おほき。を知らん。

里見八犬傳第六輯卷之二終



